

報告

社会活動委員会リージョナルステート研究委員会

令和 3 年度第 2 回研修会・施設見学会を終えて

滝澤 嘉史

1. はじめに

令和 3 年 11 月 22 日、日曜日と祝日の間の月曜日、図-1 の日程でリージョナルステート研究委員会令和 3 年度第 2 回研修会・施設見学会を開催しました。当研究委員会の恒例行事として毎年しておりましたが、コロナウィルス感染拡大に配慮して昨年は開催を断念しましたので 2 年ぶりの開催となりました。しかし、未だ十分に配慮する必要があります。バスには窓を閉めきった状態でも数分で空気が全て入れ替わるシステムが備えられていますが、万全を期して全員が窓側または通路側を空けて着席できるように乗車定員の半分に参加人数を制限して開催しました(図-2 参照)。

8:45 札幌駅北口バスターミナル集合・出発
10:15 砂川 SA 着、一般道へ
10:25 除雪ステーション着
柴田一孔市長と合流・乗車
道の駅うたしな
道道文珠砂川線、道道赤平森井江線
かもい岳スキー場
恵別ロマン座(集合写真)
チロルの湯(意見交換会・昼食)
13:10 チロルの湯発
14:30 ホワイトデータセンター(美幌市茶志内)
15:40 三笠市役所(木質バイオマスボイラー)
17:00 札幌駅北口バスターミナル到着・解散

図-1 当時のスケジュール



図-2 黙食ならぬ黙乗車を要請したバス車中

施設見学会は、今年の 5 月 28 日に開催しました第 1 回研修会にて日本一人口が少ない市での市政の現状と課題を説明して頂いた歌志内市、美幌市のホワイトデータセンター、三笠市の木質バイオマスボイラーの 3 箇所を選定しました。

参加者は、技術士会会員 17 名、北海道本部会友 2 名、歌志内市で合流しました市長の柴田一孔氏を含めた合計 20 名です。本稿は 3 箇所の見学先のうち、歌志内市について報告するものです。他の 2 施設については次号(157 号)に譲ります。

2. 北海道地方部に目を向ける

(1) 札幌への人口の一極集中

リージョナルステート研究委員会では、これまで我々が住む北海道が全国でも早い速度で少子高齢化、人口減少が進行しており、特に地方部では限界集落化が大きな問題となっていることを説明してきました。2020 年度の国勢調査によると、北海道の人口 522 万人の 38%にあたる 197 万人は、札幌市に集中しています。札幌市の人口集中度合は、各都道府県の最大都市と比較すると 15 位(1 位:東京 23 区、2 位:京都市、3 位:仙台市)となりますが、札幌市の面積は北海道全体の 1%に過ぎず、集中度に面積を加味すると全国 1 位となり人口の偏りが際立つ状態です。道内人口は、2045 年までに 20 年比 23%減の 400 万人(国立社会保障・人口問題研究所の推計)になるとされ、札幌市は 9%減の 180 万人に留まりますが、道内に占める札幌市の人口割合は 45%に達し、偏りがさらに増大するとされています。

また、道内他市町村から札幌市への「転入超過数」

(転入者数と転出者数の差)は年間 1 万 940 人となります。2020 年の札幌市内への「転入超過数」を他市町村の合計人口で割った「吸引力」は 0.33%であり、東京圏(東京、埼玉、千葉、神奈川)が全国各地から引き寄せている値(0.11%)よりも高いそうです。そして、札幌市の「合計特殊出生率」(1 人の女性が一生の間に産む子供の平均的な人数)は 2019 年で 1.12(人口を維持するには 2.07 程度が必要)であり、全国政令市で最低レベルとされています。道内各地で死者数が出生数を上回る「自然減」が続く中、札幌市は各地からの転入者が人口を支えている状態となっています。

人口の一極集中の是非は、現在のところ我々が持っている判断材料が乏しく判定できませんが、データから北海道全体、特に地方部の人口減少の一因となっていることは確かな様です。

(2) 離れたのではなく押し出された

一方、地方から札幌に移り住んだ人たちの移転理由は、公共交通や除雪の不便さ、勤め先不足などが多いそうです。このほかにも医療・福祉サービスや教育の質なども挙げられ「離れたのではなく押し出された」という認識があるようです。このような地域が抱える止むを得ない現状が充実していれば、離れる人たちも少なかったのかもしれませんが。限られた雇用や生活の不便さなどが今後改善できれば、進学や就職などにより止むを得ず札幌市や東京圏へ移住したとしても、結婚、出産、転職、定年退職、配偶者との死別や離別など人生イベントのタイミングで戻って来るかもしれません。

(3) 歌志内市へ何う

リージョナルステート研究委員会は「北海道、特に地方部が自律、活性化してゆくために何が必要なのか」という問題提起をテーマに活動し、北海道、特に地方部に豊富に存在する自然エネルギーに着眼し、これを有効活用することで、地域内で使用するエネルギーを地産地消して燃料代としてこれまで地域外へ出ていた支出を抑制し、エネルギー関連産業やこれに伴う雇用の創出や人口増、人口増に伴う地域産業の維持と促進などの連鎖が生まれ「豊かな地域社会の実現」が可能と考えました。では実際にど

うなのでしょう。今回は、歌志内市にお願いして現地を視察させて頂きました。

3. 歌志内市を視察する

(1) 歌志内市の概要

歌志内市は明治 23 年より石炭産業で発展、昭和 23 年に人口 4 万 6 千人となり、昭和 33 年には千歳市や滝川市、砂川市とともに市政施行となりました。平成元年に 9 千人程だった人口は、現在 2,997 人となり、平成時代の 30 年間で 3 分の 1 に減少しました。市の基幹産業は現在も石炭です。露頭採掘で北電砂川火力発電所へ納炭していますが、CO₂排出量が多い旧式の石炭火力発電所を 2030 年度までに段階的に休廃止することを受け、関連企業や地域経済への影響が懸念されます。



※歌志内市 HP より

図-3 歌志内市位置図

(2) バス車窓より歌志内市を巡回

バスは高速道路を砂川 SA で下り、砂川市と歌志内市の文珠地区を結ぶ道道 627 号文珠砂川線経由で歌志内市へ向かいました。

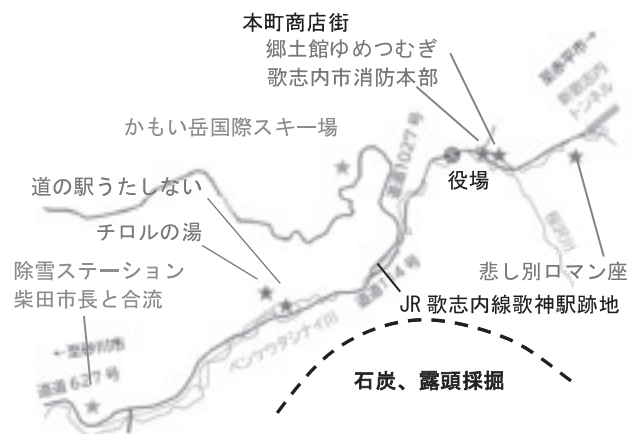


図-4 歌志内市で市内を巡回した区間

道道文珠砂川線沿の除雪ステーションで柴田市長と合流してバスに乗車して頂き、バス車窓より市長の説明を受けながら市内を巡回しました。

巡回した区間(図-4 参照)は、歌志内市南端に位置する除雪ステーションを出発点として道道 627 号文珠砂川線、道道 114 号赤平奈井江線を北上して新歌志内トンネルまでです。まずは北海道で建設され、かつて歌志内市で運営していた「道の駅うたしない」(図-5 参照)で乗車の疲れを癒し、「かもい岳国際スキー場」、「悲別ロマン座」、「郷土館ゆめつむぎ」、昼食会場の「チロルの湯」を終着点としました。



図-5 「道の駅うたしない」奥は「チロルの湯」

(3) 文珠砂川線と赤平奈井江線沿線

歌志内市は、道道沿いに役場、市立病院、病院に併設した老人施設、高齢者住宅、グループホーム、小中学校、集合住宅、個人住宅、店舗、社屋などが並ぶ市街地が形成されています。下水道施設も道道に管渠管理延長 40 数キロ埋設されています。歌志内市は 2m ほど掘削すると岩盤が出てきます。このため、下水道整備工事は推進工法が採用されました。建設時期は昭和 50 年代、当時の技術で深さ 10m 以上の発進立坑、到達立坑を設置して行う推進工事は、スーパー大手建設会社の技術力と 80 億円の莫大な建設費を投じて完成させました。下水道事業は、北海道の石狩川流域下水道に参加し、近隣 6 市 4 町の組合で運営しています。

沿道の住宅は、賃貸の集合住宅が多く、古いものから新しいものまで軒を連ねています。これらに交じって個人住宅が点在しています。古い炭鉱住宅は整備され、集住化が進められているそうですが、住

み慣れた住宅を離れることへの抵抗もありスムーズには進んでいないようです。個人住宅もありますが、ほとんどが空き家です。住んでいた人が亡くなり、親族が住むこともなく、解体されることもなく放置され、時を経て雪の重みで自然倒壊しているそうです。倒壊してしまった家屋は、市の予算で撤去・整地されるケースもありますが、個人の所有物であり所有者不明のケースも多いそうです。道道沿線にはこのような住宅も多数みられました。

市の条例で定めている訳ではないのですが、公共施設や個人住宅を問わず沿線の建物には自主的に緩い勾配の三角屋根(オーストリアのチロル風)が広く用いられています(巻頭グラビア参照)。道道を北上して新歌志内トンネルで U ターンしましたが、トンネルを抜けると赤平市です(図-6 参照)。



図-6 延長約 1km のトンネルを抜けると赤平市、新歌志内トンネル手前で U ターン

(4) かもい岳国際スキー場

赤平奈井江線沿線の JR 歌志内線歌神駅(かしんえぎ)跡地から道道 1027 号砂川歌志内線へ入り、かもい岳国際スキー場へ向かいました(図-7 参照)。



図-7 JR 歌志内線歌神駅(かしんえぎ)跡地

人口が多かった頃、歌神駅からかもい岳国際スキー場へ向かう高台の傾斜地にも多くの市営住宅が並んでいたそうです。老朽化や利便性の問題から空戸が多く、アクセス道路が急勾配でありロードヒーティング化していましたが、集落の全家賃収入を得てもヒーティング代すら賄えない状況でした。入居者には、市の現状を理解して頂き、移転の場所や時期について意向を聞きながら市内を縦貫する幹線道沿線の設備が整った住宅へ移住して頂いたそうです(CH155号より)。傾斜地を横手に橋長270.0m、曲線半径200mのPC3径間連続ラーメン箱桁橋の「かもい大橋」(図-8参照、余談ですが、筆者は建設当時に現場見学会で伺っています。)をわたると「かもい岳国際スキー場」に到着します。



図-8 歌志内市に架かる「かもい大橋」

かもい岳国際スキー場は、1961年に市営スキー場として開設されました。隣接する「ホテルかもい岳温泉」とともに市が所有して管理運営していました。歌志内市の職員としてスキー場の整備に従事してきた齊藤博氏が1981年に「かもい岳レーシングチーム」を創設し、スキー選手の育成に尽力し、清澤恵美子選手や石井智也選手らを輩出しました。その後、市職員を退職し、スキー場の運営と選手育成に専念されたそうです。2007年からは指定管理者「プラッサ」として運営管理を行うこととなりましたが、少子高齢化の影響を受けるとともに市の財政難により指定管理費が無料となるなどで財政難に陥り、2018年に営業停止となりました。その後2020年に札幌市東区の「M・かもい岳」へスキー場は温泉施設とともに無償譲渡され、その年の12月には営業が再開されたそうです。

かもい岳国際スキー場から南側の山々を眺めると、石炭の露頭採掘場が遠目に確認できます。第1回研修会にて採掘跡地を活用して太陽光発電所を建設する提案がありました。太陽光発電所は上空に太陽光の照射を遮るものがなく敷地が広大であることなどが条件となりますので、現地確認も予定していましたが、当日は採炭作業中のため傍に寄って確認することはできませんでした。

(5)「昨日、悲別で」悲別ロマン座

歌志内市には「昨日、悲別で」のロケ地となった「悲別ロマン座」があります。「昨日、悲別で」は、1984年に日本テレビ系列で放映されました倉本聰脚本のテレビドラマです。主題歌の「22歳の別れ」も印象的でした。歌志内市の隣町の上砂川町がモデルで架空の町「悲別」を舞台に、夢を追って東京へ出た若者、地元に残った若者達の葛藤と心の交流を描いた話です。タップダンスに夢をかけて上京した雨宮良が演じる主人公のリュウ、東京で再会する地元の友人役に石田えり、地元で駅員となった友人役に布施博、家業を継ぐ友人役に梨本謙次郎、主人公の妹役に斎藤慶子、母親役に五月みどり、その愛人で地元の大物役に大滝秀治という豪華な配役でした(敬称略)。ストーリーは、かつて地元の基幹産業であった炭鉱が閉山の危機に追い込まれ、国鉄の廃線が噂された時代を舞台として繰り広げられていました。小さな町で個人的な秘密は持てない、すぐに町全体に広まってしまうことの怖さをこのテレビドラマで感じたことも覚えています。特に印象的だったシーンが、リュウが地元の大物と会食するシーンです。リュウが自分の愛人の息子だからかドラマでは2人で会食するシーンが多かったと思います。大物がリュウへ「妻の白髪を見つけた、いくら化粧をして外見を取り繕っても本質は隠せない」というようなことを伝えるシーンがあるのですが、衰退してゆく「悲別」を風刺しているようで感慨深かったです。大物は「悲別」の状況をすべて知って覚悟している、若者はできることなら「悲別」から離れたいと思っているが地元への愛着や責任があり離れられない。気持ちの板挟みに葛藤し、時世に流されながら交わる人間模様を毎回ワクワクしながら視聴していたのを思

い出しました。倉本聰氏は、このドラマを通じて、今の北海道地方部の現状を予見し、地域が本来あるべき姿をメッセージに残したのかもしれませんが(図-9 参照)。



図-9 ロマン座に併設された倉本聰氏のメッセージ

ロマン座の建物は、最近まで喫茶店として営業していた形跡があるものの現在は閉店しており、建物の半分は倒壊していました。倒壊していたのはドラマのロケで使用された劇場の部分です。ドラマのロケ地という特色をもつものの、担い手がないため管理が行き届いていないようです。ドラマの放送から30年以上経過しており、倉本聰氏に取り上げてもらえるような宣伝活動も行えないため、富良野市の「五郎の石の家」(※一旦は閉館したものの2021年に営業再開)のようにはいかないようです。本誌巻頭グラビアにもあるように、ここで記念撮影しました。

(6) 唯一の商店街に空き家が目立つ

次に向かったのは、歌志内市に今も残る唯一の商店街、本町商店街です。本町商店街は歌志内市役所の近くにあり、道道114号赤平奈井江線の1本北



図-10 本町商店街(左手前：郷土館ゆめつむぎ)
GoogleMapより

側の通りに道道と平行して東西方向へ約300m区間にあります。通りには「郷土館ゆめつむぎ」、「歌志内市消防本部」、「郵便局」が隣接して並んでいます。営業している店舗がわずかに残っている程度で廃業しているところが目立っていますが、飲食店やスナックも営業しているようです。「郷土館ゆめつむぎ」(図-10 参照)は、休館日が月曜日で、見学会の日程と重なり今回は拝見することができませんでした。歌志内市消防本部の建物は、かつて市内唯一のスーパーでした。既に倒産しており、現在は消防施設として利用されているとのことです。現在、歌志内にはスーパーがありませんが、道道沿にコンビニエンスストアや個人商店が営業しています。

(7) 歌志内市の近況

人口2,997人に対して市職員は、消防署、病院の職員を入れて135名(市内役所内88名)です。今年は新たに14名の職員が採用されました。採用された職員は全員社会人経験者で、ほとんどが道外からの移住者です。神奈川県から移住してきた職員は、結婚を機に移住を決意したとのことです。

歌志内市内には高等学校がありません。車で15分程走行すると、赤平市や砂川市に通える立地にあるため通学している学生が多いですが、進学を期に隣町へ移住する家庭もあります。高校を卒業しても市内での就職が難しく、就職や進学する機に市を離れる若者達が後を絶たないそうです。一方で、今年採用した市職員のように道外から移住してくる人もいます。市内の小中学校に通う学童は100名程度です。将来、彼らが市職員や地元企業の社員となり、また家業を継ぐなどして地元に残ることが期待されるのではないのでしょうか。

本町商店街に空き家が多くありましたが、市内には道外からの誘致企業の工場、地元建設会社、チロルの湯、病院、高齢者住宅などの公共施設などもあり、地元で働いている方も多くいます。採用枠にはありますが、働く場所やコミュニティの場は、ある程度確保されているように感じました。

(8) 「チロルの湯」での交流

柴田市長の案内のもと市内を巡回した後、終着点の温泉施設「うたしないチロルの湯」(北海道歌志内

市宇中村 78 番地 3、TEL：0125-42-5588)に着きました。施設は日帰り入浴や食堂利用のみならず宿泊することもできます。到着後、直ちに当該施設の会議室にて意見交換会及び昼食会を行いました。

歌志内市には人口減少対策を考える「歌志内、夢・まち・未来会議」や「札幌歌志内会」などの活動団体があることを第 1 回研修会で紹介して頂いておりました。これを受けて市長、市民の方々、技術士を交えた座談会を行いたいと考えておりましたが、連休の間の平日、日中開催では市民の方々の予定が付かず実施できませんでした。「チロルの湯」や「かもい岳温泉」などへ宿泊し、地域の活動団体の方々と情報交換して交流を深めることも面白いと思います。

市内を巡回して確認した事項を踏まえ、市長と技術士で意見交換会を行いました。

意見交換会では「石炭を採掘するには、ずい道掘削を行う必要があり、木製の支保工を使用します。木材を得るために植林が行われていたと仮定すると、炭鉱が閉山してから 30 年以上経過しており、よい木材が入手できると思われます。それを利用して木質バイオマスボイラーを導入してはどうか」などの建設的な意見もありました。意見交換会には「チロルの湯」の支配人にも参加して頂き、地域の取組みを紹介して頂きました。使用していないビニールハウス(長さ 100m クラス)3 棟を野菜工場として有効活用しています。歌志内市東光 23 番地 1 に有限会社ティ・エスフードシステム「歌志内ファーム」を設立し、水耕栽培で葉物野菜(リーフレタス、こねぎなど)を生産しています。「歌志内ファーム」で採れた野菜は、近隣町村の特産品とともに「チロ

ルの湯」の販売所で購入することができます(図-11 参照)。昼食メニューは「とんかつ定食」でしたが、「歌志内ファーム」で採れたリーフレタス、「チロルの湯」の特性ミックスピザ、郷土料理「なんこ鍋」を試食させて頂きました。「なんこ」は馬の腸です。かつて炭鉱の町として栄えていた時期に、坑内で働かせていた馬が亡くなると、その肉を食べ、内臓を鍋にして食べたのが始まりのようです。野菜やこんにゃくとともに馬の腸がやわらかくなるまで煮込んで味噌で味付けしたものです。昼食後、心もお腹もいっぱいに膨らませて、歌志内市を後にしました。

4. おわりに

歌志内市には「チロル風の街並」、「かもい岳国際スキー場」や「悲別ロマン座」などの観光資源があり、道外から移住される方々も居り、未だ気が付いていない隠された魅力があるのかもしれません。

当研究委員会では、各種自然エネルギーから地域の立地に合致したものを選択して地域が主体で活用することが「豊かな地域社会」を実現する第一歩と考えています。地域外への支出を減らすとともに地域内に雇用を生み出すことが重要なのです。

また、コロナウィルスの感染拡大を防止するためにリモートワークや Web 会議が急速に普及しました。このようなソーシャルネットワークサービスの普及を好機として利活用することで地方部の教育、医療、生活の質の向上が期待できると考えます。

住民が地域を離れた「地域が抱えるやむを得ない状況」とは何か、どのように取組み改善するのかを地域のみんなで考えることが人口減少をはじめとする地方部の衰退を留める鍵になるかもしれません。

最後に、今回の施設見学会では、柴田歌志内市長をはじめ、地域住民の方に大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

滝澤 嘉史 (たきざわ よしふみ)

技術士(建設/総合技術監理部門)

北海道本部幹事、社会活動委員会リージョナルステート研究委員会 代表

株式会社 北海道近代設計
技術部



図-11 「チロルの湯」販売所